

私の祭り、芸能研究の軌跡

宮 家 準

私は修験道を日本の民俗宗教の典型と捉えて研究してきた。そして修験道研究とあわせて、その研究方法を論じた『宗教民俗学』（東京大学出版会）民俗宗教の啓蒙書の『日本の民俗宗教』（講談社学術文庫）『生活の中の宗教』（NHKブックス）等を著した。あわせて先学に導かれて、祭りや芸能の研究も行なってきた。そこでその軌跡を記すことによって祭礼と芸能の学説史に資することにした。

昭和三五年頃、東京大学の柳川啓一先生は秩父夜祭、続いて会津の田島祇園祭の七行器行事などの調査を行なわれ、私たち大学院生も参加した。この調査では祭りをドラマとして捉えると云う視点から考察した。昭和三七年、私は慶應大学の社会学専攻に転職した。そして同専

攻の有賀喜左衛門教授を中心とした長野県諏訪郡南真志野村の調査に参加した。この折には、諏訪大社の御柱祭の規模を小さくした柱たての祭りが、同村の氏神、マキの祝神でもたされている事を通して祭りの重層構造に注目した。この後、佐原六郎教授による中央区佃島の住吉神社夏祭りの調査に参加した。この折は神輿の海、本社から月島にある御旅所への渡御を通して、同社が漁村の守護神から広域地域の鎮守となった経緯を動態的に把握した。

今一方で私は修験道の祭りに注目し、昭和四〇年に『神道宗教』四三号に論文「修験道における祭りの論理」を寄稿した。この論文では祭りに見られる浄化、交歓、神人合一、祈願のメカニズムが、密教の不動法と類似し

ていることを指摘した。その頃、シカゴ大学から東北大学に留学していたバイロン・エアハート氏を堀一郎先生から紹介され、共同で羽黒山の秋の峰と松例祭を調査した。秋の峰調査はケンブリッジ大学のカーマン・ブラッカ先生とも一緒だった。M・エリアーデのもとで学んだエアハート氏は、峰中の諸儀礼の象徴的意味を解説し、その根底にある思想を読みとるという方法をとっていた。一方、ブラッカ先生は修行の共観的理解を試みられていた。私はお二人の影響のもとに調査し、秋の峰の中に、葬式、受胎、胎内修行、出生という擬死再生のモチーフがある事を解明した。その後、近世期の大峰山の峰入を記した『峰中秘伝』にも同様のモチーフがある事を発見して、両者をあわせた論文『修験道の峰入修行におけるシンボリズム』（『哲学』四六、昭和四〇年）を発表した。羽黒山の松例祭は大晦日に位上と先達の両松聖に配された役者や集落の若者の烏とび、兎の神事、大松明立て、火の打ちかえなど一連の競争をする奇祭である。私はこれを羽黒山の冬峰修行をした位上、先達の両松聖が修行成満に際して行なう験くらべと解釈した。

山伏が関わる芸能には山伏神楽、湯立神楽、延年、田楽などがある。このうち山伏神楽に関しては戦前森口多里先生や本田安次先生が詳細な調査研究をされていた。

そこで盛岡の森口先生を訪問して、その御紹介で早池峰の岳、大償などの山伏神楽を調査した。その後山口昌男先生がこの山伏神楽に注目され、御自身も調査されると共に、岳で本田安次先生などを招いて山伏神楽のシンポジウムをなされ、中沢新一氏などと共に参加した。これを契機に本田先生から色々と御教示をいただいた。ちなみに私も留学したハーバード大学の世界宗教研究センターから慶應大学に留学されたイスラエルのアベルブフ・イリットさんが、山伏神楽の調査研究を志されたので色々と御世話をした。彼女は自分も神楽を演ずるなどして研究に没頭して博士学位論文『山伏神楽―現代日本における神事舞―』をまとめられた。

ところで折口信夫先生は國學院大學とあわせて慶應大学の国文学専攻の教授も勤められた。そして池田弥三郎・西村亨先生などがその学統を継承されており、私も両先生から御指導いただいた。特に池田先生から神楽や田楽など芸能と山伏との関わりを調査研究するように勧められた。そこで国文学専攻の井口樹生氏と共同でNHK放送文化基金の助成を受けて、宮家研究室と国文学の井口氏や保坂達雄氏などと修験道に関わる祭りや芸能の調査研究を行ない、その成果を宮家準『山の祭りと芸能』上下（平河出版、昭和五九年）として発表した。本書

は山の民の祭り、山伏の峰人や修行、霊山の祭りや芸能、山伏神楽、湯立神楽、田遊び、田楽、山伏の巫術などに關して全国の主要なものをとりあげて、モノグラフとしてまとめたものである。さらに日本の祭りや芸能を東アジアのそれに位置づけて捉えることを考えて、同僚の鈴木正崇氏と共に慶大の地域研究センターのプロジェクトの成果として『東アジアのシャーマニズムと民俗』（勁草書房、平成六年）を発表した。本書では韓国のムードン、台湾の道教、雲南など中国南部の祭り芸能をとりあげて日本の祭りや芸能との比較検討を試みた。その頃、日本学術振興会がシカゴ大学で祭りや巡礼を研究していたV・ターナー教授を招聘した。この折は彼に学んだ筑波大学の荒木美智雄氏や南山大学のポール・サンソン氏などと一緒に熊野新宮神倉の火祭りや西国巡礼の一番札所青岸渡寺を案内し、その成果を「新宮神倉お灯祭に見られるカラーシンボリズム」（『学術日報』昭和六十二年十二月号）に発表した。

國學院大學日本文化研究所では、昭和四〇年頃から倉林正次先生が祭りと芸能に關する研究会を定期的に開かれていた。特に昭和四五年から三年間にわたって、文部省の助成を受けて、総合研究「わが国における宗教儀礼の総合研究」を行なわれた。本研究では我が国の宗教儀

礼の調査研究、比較研究を行ない、日本における宗教儀礼の成立、構成、特質を解明する事を目ざしたものである。研究代表者は倉林先生で、國學院からは平井直房・小野和輝先生や、当時文学部の講師でもあった明治神宮の高澤信一郎宮司など九人、大正大学から藤井正雄氏など三人と、早稲田大学演劇博物館の吉川周平氏とあわせて私も参加させていだき、一緒に宇佐八幡宮、鹿島神宮、日光東照宮などで調査した。この儀礼研究は後に歴代明治神宮宮司を会長、倉林先生を理事長とする「儀礼文化学会」へと展開し、現在日本の祭礼、芸能の啓蒙活動に重要な役割を果たしている。

平成一〇年頃、畏友宮田登氏から朝倉書店が創業八〇周年記念に祭りと芸能を中心とした大辞典の刊行を考えているから一緒にしないかと誘われた。そこで芸能研究の第一人者の三隅治雄先生と民俗音楽を開拓された小島美子先生にも加わっていただいて企画し、祭（宮家）民間行事（宮田）芸能（三隅）音楽（小島）と担当を分けて準備にとりかかった。ところがほどなく中心となっていた宮田氏とそのもとで仕事をされていた宮本袈裟雄氏が急逝され、私がまとめ役となった。そこで鈴木正崇・和崎春日氏に加わっていただいた。そして民間行事の部分

を鈴木正崇氏に委ねると共に和崎氏に現在話題になつて

いるイベントについてまとめていただくことにした。そして五人が監修者になり、宮家研究室の阿南透氏にイベント、神田より子氏・高梨一美氏と三隅門下の高山茂氏に芸能と行事、國學院の茂木栄氏に祭、小島門下の山本広子氏に音楽を担当の編集委員をお願いして、編集にとりかかった。その後平成一年から私は國學院大學に奉職したことから茂木氏を始めとする同大学の諸氏に助けただきもした。そして約五五〇〇項目を選定し五五〇人余の方に執筆を依頼して原稿を寄せていただくと共に、写真を提供していただいた。それから十年の紆余曲折の末に平成二一年一月に、巻頭に監修者の祭り、芸能、行事、イベントの概説とそれぞれに付したカラー写真を掲げ、本文五五〇〇項目の解説、巻末に無形民俗文化財一覧、年中行事、人生儀礼一覧、文化財保護法、無形文化遺産保護条約、平成大合併後の全国市町村地図を付したB5判上下二巻、総ページ二一六頁、写真図八〇〇（うちカラー一五〇）から成る。読む、見る、引くの三様態を兼ねた『祭、芸能、行事大辞典』を完成したのである。

平成二二年國學院大學はハーバード大学のライシャワー研究所との教育・学術交流の提携を結んだ。その一貫として同研究所の前所長のヘレン・ハーデイカ教授と

共同で府中の大國魂神社の暗闇祭りの調査を行なった。この折には茂木栄氏と組んで國學院大學の大学院生と共に調査した。その成果は大学主催の提携記念のシンポジウム「祭りにおける持続と変容―府中大國魂神社暗闇祭を中心に」で、映像も交えて、ハーデイカ教授、宮家、茂木などが発表した。（『國學院雑誌』一〇二巻九号特集、平成一三年）この祭りでは特に拝観を許された御旅所での暗闇の中での祭儀で武蔵の国魂の誕生（ミアレ）が演じられていた事に注目した。

ところで祭りや芸能の映像化は國學院では茂木栄氏らにより積極的になされている。私もヴィジュアルフォークロアの北村皆雄氏作成のビデオ「羽黒山秋の峰」の解題をし、平成一七年に東京で開かれた国際宗教学・宗教史会議では、その上映を企画し解説した。また平成二五年に修験道映像製作委員会が完成した「修験道の今昔」「修験道の修行」を監修した。このうち前者は修験道の本山や修験霊山の祭りに関するものである。

あらためて云うまでもなく、祭りや芸能の研究にあたっては文献や映像のみに頼るのではなく、実際にその場に行き、さらに参加することによってその実態をリアルに体験することが望ましい。これは研究者のみならず宗教者にとっても必要なことである。祭りは自己を浄化

したうえで、神と一体になることであり、神事芸能は神のしぐさ、または神となった喜びを表明するものとも考えられる。こうした視点に立ってあらためて私のこれまでの祭り、芸能研究をふり返り、今後も新たな気持で祭り、芸能に接したいと考えている。

(慶應義塾大学名誉教授)